ぶどう産地における品種構成の変化

──シャインマスカット市場の成熟化を踏まえて──

主事研究員　吉井　薫

国内ぶどう産業では、シャインマスカットが基幹品種として定着している。栽培面積は2015年の256haから23年には2,925haへ拡大し、巨峰やピオーネを上回る国内トップの存在となっている（第１図）。一方、従来の主力品種であった巨峰は同期間に4,437haから2,257haへ減少した。

生産拡大に伴い流通量も増加し、現在では贈答需要に加え、日常消費にも広く利用される。成長局面は一巡し、市場は成熟化の段階に入りつつある。このため産地では、シャインマスカットを基幹品種としつつ、新しい付加価値の創出や品種構成の見直しが課題となっている。

本稿では、シャインマスカットの市場取引データを用いて市場構造の変化を整理するとともに、品種構成の変化から今後の産地の方向性について考察する。分析には、農業情報サービス「アグリネ」に収録された青果市況データを利用した。アグリネは農林水産省が公表する青果市況データをもとに、品目別・等級別の価格および入荷量を整理したサービスである。

1　シャインマスカット市場の構成変化

アグリネでは等級別のデータを公開しており、当総研で独自に、高等級、中等級、一般等級へ区分し、その動向を整理した（注１）。

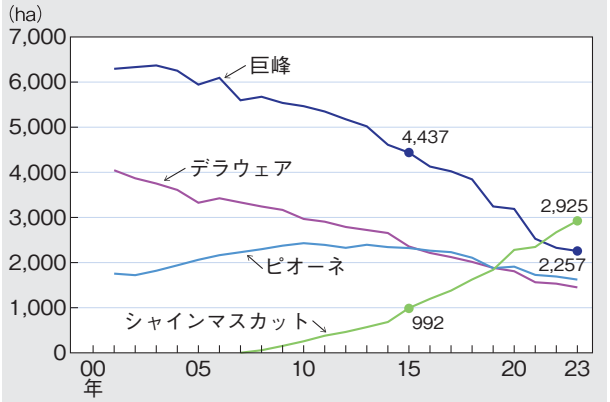
21年から25年にかけての市場構成では、高等級品のシェアは11％から７％へ低下した一方、中等級品は75％から66％へ低下したものの、依然として市場の３分の２を占める中心的な等級である。

また、年間入荷量は21年の3,172トンから25年には6,030トンへ増加し、市場全体で90.1％拡大した（第２図）。高等級品は348トンから438トンへ26％増加したのに対し、中等級品は2,385トンから3,999トンへ68％増加しており、市場拡大を牽引したことがうかがえる。贈答需要を中心とする高等級市場も一定程度拡大しているものの、量販店等を通じた一般消費向け需要の拡大が市場成長の中心となったとみられる。

価格面でも中等級品の存在は大きい。25年は、高等級の先行出荷が６月よりスタートし、お中元などの贈答ニーズを反映して高値で推移した。しかし７月以降に中等級品の出荷が本格化すると価格差は縮小し、一部の月では価格が逆転した（第３図）。市場全体の価格形成に、物量の大きい秀級の供給動向が強く影響していることがうかがえる。

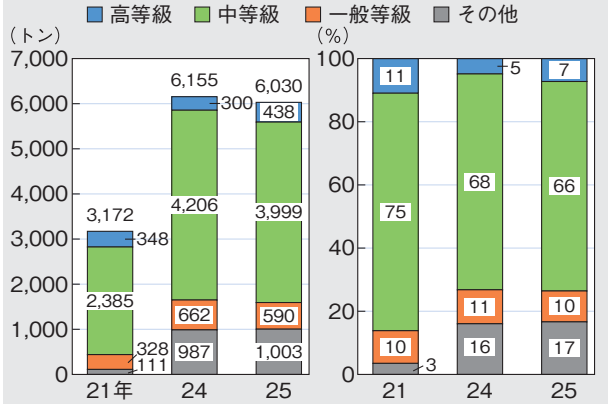
このように、高級果実としての評価を維持しつつも、中等級品を中心に一般消費市場への浸透が進み、市場は成熟化しつつある。

第1図　主要ぶどう品種の栽培面積推移



資料　農林水産省「特産果樹生産動態等調査」

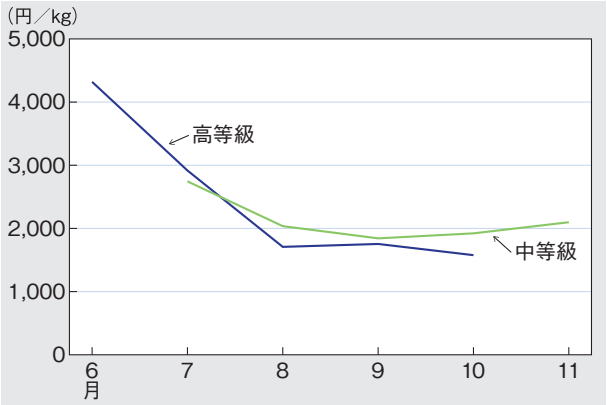
第2図　シャインマスカットの等級別年間入荷量



資料　アグリネ「市況データ」

農林中金総合研究所
https://www.nochuri.co.jp/

第3図　シャインマスカット入荷時期別の価格推移（25年）



資料　第2図に同じ

2　新興品種の動向

シャインマスカットへの集中が続く一方で、産地では次の展開を模索する動きがみられる。23年時点で栽培面積が20年対比で増加している主要品種は、ナガノパープル（＋2.9％）、クイーンルージュ®（長果G11、＋54.2％）、甲斐キング®（品種登録名：甲斐ベリー３、＋101.0％）である（第１表）。ただし、栽培面積はいずれも小さく、現時点で同品種に匹敵する後継品種は見当たらない。

一方で、増加している品種には共通した特徴がみられる。白系品種ではシャインマスカットが主力であるのに対し、黒系ではナガノパープルや甲斐キング®、赤系ではクイーンルージュ®やクイーンニーナなどが増加している。産地では異なる色系統の品種を導入する動きが広がっており、品種構成の多様化が進展している。

また、増加品種の多くは長野県や山梨県が育成した県独自品種である。特に長野県では、シャインマスカット、ナガノパープル、クイーンルージュ®を組み合わせた三色ぶどうの展開が進められ、単一品種一辺倒からの脱却を目指す産地の取組みが表れている。

新品種が備える特性は色以外にもある。例えばクイーンルージュ®は「赤いシャインマスカット」と呼ばれるほど食味に優れている。また、近年は温暖化によるぶどうの着色不良が問題となっており、高温条件下でも比較的着色が安定する甲斐キング®やクイーンニーナは、産地課題の克服という大きな役割を担っている。

品種によっては高い市場評価も得ており、東京都中央卸売市場における25年の年平均価格は、ナガノパープルが2,348円／kgとシャインマスカット（1,965円／kg）を上回っている。ただし、取扱量は267トンにとどまっており、高価格帯市場を形成しつつも、規模拡大は限定的である。

第1表　品種ごとの栽培面積の動向（20年から23年）

色	品種	育成主体	品種普及	2020年（ha）	2023年（ha）	増減率
白	シャインマスカット	農研機構	全国普及	2,281	2,925	28.2%
黒	巨峰	民間育成	全国普及	3,189	2,257	▲29.2%
黒	ピオーネ	民間育成	全国普及	1,910	1,623	▲15.0%
黒	ナガノパープル	長野県	県独自	174	179	2.9%
黒	甲斐キング®（甲斐ベリー3）	山梨県	県独自	30	60	101.0%
赤	クイーンルージュ®（長果G11）	長野県	県独自	103	159	54.2%
赤	クイーンニーナ	農研機構	全国普及	55	61	12.5%

資料　第1図に同じ
（注）　ワイン・加工用途の影響が大きい品種は除外。（）内は品種登録名。なお、ナガノパープルは当初は県内のみ栽培可能であったが、18年以降、県外での栽培も許諾されている。

3　品種構成の変化が示すもの

これまでのぶどう生産では、巨峰からシャインマスカットへと全国規模で主力品種が交代してきた。一方、近年増加している新品種の多くは県独自品種であり、単一品種ではなく複数品種を組み合わせた商品構成が広がりつつある。

このように、産地では基幹品種を軸に異なる特性を持つ品種を組み合わせ、販売機会の拡大とリスク分散を図る戦略を進めている。品種ポートフォリオの最適化は、今後の産地競争力を左右する重要な経営課題の一つである。

＜参考資料＞

・アグリネ「市況データ」　https://agrine.jp/
・東京都中央卸売市場「市場統計情報（年報）」
・農林水産省「特産果樹生産動態等調査」

（よしい　かおる）

（注１）一般的に等級は粒の大きさや房の状態を中心に判別される。本稿では、主産地で贈答用ぶどうに付与される「青秀」、「赤秀」を高等級に区分した。同様に高級スーパー～小売店等で扱われる「秀」級を中等級に、一般的なスーパー等で扱われる「優」「良」級を一般等級に区分した。なお、「その他」等級には品質の高い特殊規格品から規格外品まで幅広く含まれるため、内容の解釈には留意が必要である。

農林中金総合研究所
https://www.nochuri.co.jp/